

- ◎ 解答は解答用紙に書くこと。(氏名は書かないこと)
 字数制限のあるものは、句読点などの記号も字数に含む。

一 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

受 験 番 号

①言葉は乗り物だ、とよく表現されます。その乗り物が、自分と相手の間を行ったり来たりしてコミュニケーションを形成しています。「今日は友達と一緒に下校したいな」と思ったときには、あらかじめ友達に「授業が終わったら一緒に帰ろうよ」と口に出して約束しないとその子はこちらの気持ちをゆも知らずに帰ってしまうでしょうし、「夜ご飯はカレーが食べたい」と思っているにも親にいつもおかなければ、違う食べ物が出てきてがっかりすることでしょう。今こうしてこの文章を皆さんが読んでいるということは、私が乗り物を通じて皆さんに私の考えを伝えているわけです。もしも、私たちに言葉がなかったとしたら…。もちろん、体の動きやジェスチャー、目線などでもコミュニケーションを取れるでしょうが、思う通りの輪郭をそのまま相手に伝えることは相当至難しなんになります。自分の内部にある思いや考えや意思といったものは、自発的に相手に向かっているわけではありません。言葉という乗り物を用いて、外へ送り出し、相手に届くようにしているのです。普段は全く意識しませんが、言葉の持つ力は大きく、私たちはそれに頼って生きていくといっても過言かごんではありません。

江戸時代の話の一つ紹介します。東北の武士と西国の武士が江戸で話した際に、互いの言葉が通じなかった。(A) 距離のせいだなまりがきつかったせいです。相手の話すことがあたかも外国語のようであらぬ。そこで能の詞章ししょうセリフと地の文を使って少しずつコミュニケーションを図ったそうです。当時、武士が教養として学んでいたのが能の言葉で、その共通項でもってなんとかやり取りが出来たとか。それが無かったら、二人は言葉で理解することができなかった。とても興味深いエピソードだといえます。

余談ですが、ちよつと考えてみても言葉というのは不思議です。どら焼きと言われれば、円盤形えんぱんの甘い生地が上と下に二つあって、その間にあんこが挟まった、おなじみのおやつを思い出すことが出来て、桜と文字に書けば春に咲くピンク色の花とその枝をイメージすることが出来ます。まさに名は体をあらわします。③これはすごいことだと思いませんか。そんな魔法のような言葉を、皆さんは使うことが出来るのです。

閑話休題、自分のことはが相手に届き、受け入れられ、相手からも言葉や反応が返ってくる。それがコミュニケーションです。あなたは親とこういう会話をしたことはないですか。

「カバンにあれを入れ忘れちゃった」

「あれって何」

「あれだよ、あれ」

「ああ、あれならあそこ見たよ」

「そうか、あそこに置きっぱなしだったのか。ありがとう」

この会話、文字にするとなんとなくおかしく感じますが、日常、ありふれた光景でしょう。事実、二人は【一】【一】話を通してののです。「あれ」とか「あれ」は具体的な何かを示しているわけではありません。「あれ」はカバンに詰めるものですが、筆箱なのでしょうか、それともノートなのでしょうか。でも、二人の間では共通認識ができていて、実際にコミュニケーションが取れています。極端な話ですが、「あれ」と言っただけで「はい」と持つてきてもらえる場合さえあると思います。(B) (C)、通じたことに対する答え、応答が要になるのです。

朝、「おはようございます」と先生にあいさつをする。そうしたら、先生からも「おはようございます」と返ってきた。言葉のキャッチボール、これが普通です。もしここで先生からのあいさつがなかったら、どう感じますか。きつと複雑な気持ちになるでしょう。立場が逆でもまた、同じこと。返事がなくては、コミュニケーションは成立しません。

(C) (C)、言葉が通じただけでは、真のコミュニケーションが出来ていることにはなりません。言葉というものは、たとえ伝わったとしても、使いようによってその効果が全く反対に表れることもあります。つまり、コミュニケーションにマイナスに働く側面そくめんも持ち合わせています。皆さんは、相手から受け取った言葉で、嫌な気持ちになったり、傷ついたり、落ち込んだりしたことはないですか。おそらく、あるのではないかと思います。先に述べたように、言葉には力があります。ですからその扱い方には十分に気を付けてはなりません。

しばしば「いじる」という言葉を耳にします。言葉で相手をもてあそぶという意味でしょう。「このいじりて、いじられる」という関係はほとんどコミュニケーションとは言えないのではないのでしょうか。いじる側は相手のことをどだけこつけいに表現して、あくまで自己満足を得るだけですから、いじられる側からすれば苦痛を伴うばかりです。「いじられて、喜んで笑っているやつもいるよ」と言っている人は認識を根底から変えるべきでしょう。その笑いは苦笑くせういか、あるいは追従しゅうじゆ

のしるしなのです。心から、満面に笑うそれではありません。

コミュニケーションの成立は、相手の表情や気持ち、心に沿うことから始まります。一方的ではなく双方向のものです。くだいようですが、言葉は乗り物です。あなたは、その乗り物をうまく扱えていますか。暴走すれば、交通事故を引き起こすのは目に見えていますし、相手からの赤信号を見落としてしまったら、著しく過失を招きます。言葉という乗り物を乗りこなしてはじめて、相手とのつながりや信頼は築けるのです。(河合 隼雄『言葉について』より)

問一、傍線部①「言葉は乗り物だ」とあるが、ここで使われている表現の仕方が用いられている文を、次のア～エの中から一つ選び記号で答えなさい。

ア すやすやと眠っている。 イ 天気予報によると、明日は雨のようだ。 ウ パソコンは便利な道具だ。 エ 彼女は僕の太陽だ。

問二、(A) (B) (C) (D) に当てはまる語を、次のア～オの中からそれぞれ一つ選び記号で答えなさい。

ア もし イ なぜなら ウ また エ すなわち オ しかしながら

問三、傍線部②「その共通項」とは具体的にはどのようなものか。それを説明した次の文の空欄に当てはまる箇所を本文中から抜き出さなさい。

(X) (Y) が、江戸で話した際に、コミュニケーションを図るために用いた (Z) (W) のこと。

問四、傍線部③「これ」が指し示す内容を、次のア～エの中から一つ選び記号で答えなさい。

ア 辞書を見なくても、言葉の定義が分かるということ。 イ 言葉には、人それぞれが抱く理想的なものがあるということ。
ウ イメージするものに対応する言葉があるということ。 エ ある言葉に対応して、そのものがイメージできるということ。

問五、【 一 】に当てはまる四字熟語を、次のア～エの中から一つ選び記号で答えなさい。

ア 以心伝心 イ 一期一会 ウ 単刀直入 エ 絶体絶命

問六、傍線部④「暴走すれば、交通事故を引き起こす」とはどういうことか、次のア～エの中から一つ選び記号で答えなさい。

ア 相手の心を考えて、言葉を投げかけることができないために、相手を傷つける可能性が高いということ。
イ 相手の心を考えず、一方的に言葉を投げかけることで、自分が傷つく可能性が高いということ。
ウ 相手の心を考えず、一方的に言葉を投げかけることで、相手を傷つける可能性が高いということ。
エ 相手の心を考えて、間違った言葉を投げかけるために、自分が傷つく可能性が高いということ。

問七、筆者はコミュニケーションとはどのようなことだと考えているか。「〜ということ」につながるように、本文中から四十字以内で抜き出し、始めと終わりの五字を答えなさい。

問八、次の1～5について、本文の内容と合致するものには○を、合致しないものには×を、それぞれ答えなさい。

- 1 体の動きや目線の方が言葉よりも瞬時的なので、細かい伝達が可能だ。
- 2 ものの形や姿で連想されるイメージから、その名前が付けられることがある。
- 3 「あれ」などの指示語では、コミュニケーションをとることはできない。
- 4 言葉には力があり、使い次第で良い関係にも悪い関係にも導くものである。
- 5 相手の気持ちを推し量ることなしに、コミュニケーションは生まれない。

二

次の文章を読んだ後の問いに答えなさい。

「そうか……まさか、インドとはな」

「IT関連の事業では、今、注目株の国なんだ」

「ふーん、おれには計り知れん世界だな。おまえの話聞いてると、何ていうか、世の中って知らないことばかりだっただって感じるなあ。自分の知っている世界が
いかに狭いか、わかるよな」

「何言ってるんだよ。それは、こっちのセリフで」

口をつぐむ。窓の外に薄茶色の外壁をした大きな建物が見えた。安芸津市役所と表示板が出ている。その外壁に垂れ幕が二本、下がり、風に揺れていた。

『祝 安芸津高校野球部 選抜甲子園大会出場』

『がんばれ 安芸津ナイン 郷土の誇り』

「すいこね」

「ごめんなさい。わたし、もうだめみたい」

それが、共に生きた時間の果てに、千穂の残した一言だった。そうだなと頷くことしか、黙って見送ることしかできなかった。不甲斐ないと思う。その不甲斐なさを母への怒りに転化して、ごまかしていたのだ。気がついていたら、気がついたときには、母の七回忌はとうに終わっていた。

「おまえが生まれて、母さん狂ギしたんだ。おれ、よく覚えている。産着のおまえを抱いて、母さん、泣いてたもの。わたしの子だって、何度も何度も呟いてた。よく、覚えている」

おふくろが母さんに変わった。修也が唇を噛む。

「母さんになったら、おまえは命より大切だったんだ。奇跡みたいに、神さまから授かった宝だったんだよ。おまえが生まれたから、母さんは親父のこと、許そうと思えたんじゃないか。これ、おれの考え過ぎかもしれないけど、母さん、親父を許すためにも、どうしても自分の子どもが欲しかったんじゃないのかなあ」

「けど……あまり仲のいい夫婦じゃなかったよな。何か冷めてるっていうか、笑い合うみたいなどこ、なかったし、喧嘩もしてたし。まあ、おふくろが一方的に怒ってただけで……」

いや、どうでもいいじゃないか、喧嘩のことなんて。おふくろのことより、親父のことより、兄貴は……。

「そりゃあ、母さんにしたらきれいさっぱり、忘れるなんてできないだろう。おれが目の前にいるんだしな」

「兄ちゃん！」

腰が浮いた。シートベルトが食い込んでくる。

⑥「いっただよ、いつ知ったんだ。今、話したこと、いつから知ってたんだ」

「中一のととき。夫婦喧嘩してるの聞いちゃって、そこで、おれのこと言ってたから、気になって……後で親父を問い詰めたんだ。まあ、おれなりに感じてたこともあったしな」

修也の指がハンドルを握り込む。

「おれ、養子だつてことは辛くなかった。おまえが生まれたことも、嬉しかったんだぞ。兄ちゃん、兄ちゃんって言われて、ほんとに嬉しかったんだ。けど、母さんにとつておれは……一度だけ、中二のとときだったな、母さんに『おまえは、あの女に似てきた』って言われたことがあって……それが、すごく応えた」

「中二……」

素振りをしていた背中が浮かぶ。鋭く強く空気を裂く音が聞こえる。あれは、何かを断ち切るために、東の間でも忘れるために、野球にのめり込むしかなかった少年の後ろ姿だったのだろうか。

⑦「おれは、おまえが羨ましかったよ」

野球のことだぞと、修也は息をつく。

「おまえ、野球を楽しんでたろう。本当におもしろがってたよな。おれにとつて、野球は甲斐の家を出る口実だったり、自分ではどうしようもないことから目を逸らす手段だったりして……心底、野球そのものを楽しんだ記憶なんてなくてな。あつ、今は違うぞ。指導者になって子どもたちと出会って、今はほんとに楽しんでる」

修也が笑う。自分の教え子たちに心を馳せた柔らかな笑みだ。英斗は笑えなかった。顔の筋肉が強張って、うまく動かない。

(あさの あつこ『晩夏のプレイボール』より)

問一、傍線部 a～d のカタカナと同じ漢字を使う熟語を、それぞれア～エの中から一つ選び記号で答えなさい。

- | | | | | |
|---------|--------|-------|-------|--------|
| a 「二タン」 | 「ア タン位 | イ タン検 | ウ タン生 | エ 両タン」 |
| b 「位チ」 | 「ア チ球 | イ 価チ | ウ 装チ | エ 旧チ」 |
| c 「遠エン」 | 「ア エン方 | イ 良エン | ウ エン説 | エ エン素」 |
| d 「狂ギ」 | 「ア 歓キ | イ キ望 | ウ キ業 | エ 植キ」 |

問二、二重傍線部「」の「」のうち、文法的に異なるものを一つ選び記号で答えなさい。

問三、傍線部①「目は笑っていないかった」について、次の A・B に当てはまるものを、後のア～オの中からそれぞれ一つ選び記号で答えなさい。

- | | |
|---------------|---------------|
| A この時の「修也」の様子 | B この時の「英斗」の感情 |
| ア 驚愕 | イ 真剣 |
| ウ 狼狽 | エ 陽気 |
| オ 緊張 | |

問四、傍線部②「まざまざ」とあるが、「まざまざ」という言葉の使い方として正しいものを、次のア～エの中から一つ選び記号で答えなさい。

- | | |
|------------------------------|-------------------------------|
| ア まざまざとしている夜空が、私達の心に広がっていった。 | イ コンクールで優勝した彼の表情は、まざまざと輝いていた。 |
| ウ 私は彼との実力の差を、まざまざと思い知らされた。 | エ 彼の段取りの悪さによって、まざまざとした結果になった。 |

問五、傍線部③「間の抜けた」とはどのような状態か。次のア～エの中から一つ選び記号で答えなさい。

- | | |
|------------|------------|
| ア 拍子抜けした状態 | イ 怒りを覚えた状態 |
| ウ ひらめいた状態 | エ 落ち込んだ状態 |

問六、傍線部④「決心」の熟語の構成を、A群のあく力の中から一つ選び記号で答えなさい。また、同じ構成の熟語を、B群のあく力の中から一つ選び記号で答えなさい。

- A群 ア 同じような意味の漢字を重ねたもの イ 反対または対応の意味を表す漢字を重ねたもの
ウ 上の字が下の字を修飾しているもの エ 下の字が上の字の目的語・補語になっているもの
オ 主語と述語の関係にあるもの カ 上の字が下の字の意味を打ち消しているもの

B群 ア 握手 イ 不幸 ウ 因果 エ 楽勝 オ 国立 カ 寒冷

問七、傍線部⑤「そうではないと言い切れなかった」とあるが、その理由として最も当てはまるものを、次のア～エの中から一つ選び記号で答えなさい。

- ア 自分が故郷に帰らない原因は、自分の安芸津高校での行いによるものであり、そのことを思い出すのが嫌だと考えているから。
イ 自分が千穂と別れた原因は、母の自分への過度な愛情と千穂への冷たさによるものであると考えているから。
ウ 自分が千穂と別れた原因は、自分の修也へのコンプレックスと母への愛情が原因であると考えているから。
エ 自分が千穂と別れた原因は、母の自分への過度な愛情とその裏側にある憎しみによるものであると考えているから。

問八、傍線部⑥「いつだよ、いつ知ったんだ。今、話したこと、いつから知ってたんだ」に使われている表現技法を、次のア～エの中から一つ選び記号で答えなさい。

- ア 倒置法 イ 直喩法 ウ 反復法 エ 擬人法

問九、傍線部⑦「おれは、おまえが羨ましかったよ」とあるが、その理由を簡潔に説明しなさい。

問十、本文の内容に合致するものを、次のア～エの中から一つ選び記号で答えよ。

- ア 英斗は、すでに両親から知らされていた修也の過去について話し出され、気まずさを感じたため笑えなくなっている。
イ 修也と英斗は、母の介護についてもめたことが原因で疎遠になっていたが、今回和解するために十年ぶりに再会した。
ウ 英斗は、修也に対して劣等感を抱いてきたが、修也の弱みを知ること、自分の人生を肯定できる気持ちになっている。
エ 英斗は、修也の話によって、母の執拗な愛情が理解できたと同時に、兄の気持ちを考えるといたたまれなくなっている。

三

次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

問一、次の各文の傍線部を、主語にふさわしい敬語に直すとき正しいものを、それぞれア～ウの中から一つ選び記号で答えなさい。

- ① 校長先生は、どこにいますか。 【ア おります イ いらっしゃいます ウ おらっしゃいます】
② 校長先生の言うことを聞きましよう。 【ア おっしゃる イ 話さられる ウ 申し上げます】
③ 校長先生が本を読む。 【ア お読みになる イ 拝読する ウ 読みます】

問二、「悲しい」という意味の慣用句になるよう、次の()に入る漢字を、後のあく力の中からそれぞれ一つ選び記号で答えなさい。

- ① 断()の思い ② ()を切られる思い ③ ()が張り裂ける思い
ア 目 イ 足 ウ 胸 エ 身 オ 舌 カ 腸

問三、太郎、次郎、三郎がいます。太郎は正義感が強い正直者、次郎はずるがしこくてうそつき、三郎は本当のことをいうかわソをつくか分かりません。しかも、この三人、なんと見た目はみんな三郎なのです。以下の発言をもとにA・B・Cはそれぞれ誰か、その組合せとして正しいものを、後のあく力の中から一つ選び記号で答えなさい。

- A 「私は太郎じゃないです」 B 「俺は次郎ではないぞ」 C 「僕は三郎ではないよ」
ア A 「太郎」 B 「次郎」 C 「三郎」 イ A 「次郎」 B 「三郎」 C 「太郎」
ウ A 「三郎」 B 「次郎」 C 「太郎」 エ A 「三郎」 B 「太郎」 C 「次郎」

問四、Aさん、Bさん、Cさん、Dさん、Eさんの五人が国語の課題をしている。

- ・ Aさんより先にEさんが課題を終えた。
- ・ Bさんの次にAさんが課題を終えた。
- ・ DさんはCさんの次に課題を終えた。

この時、Eさんの達成順位としてあり得るものを、次のア～オの中から一つ選び記号で答えなさい。

- ア 一位のみ イ 二位のみ ウ 一位と二位 エ 一位と三位 オ 二位と三位